

温古知新はいゝやすく行いやすいことではない。よき伝統の正しき領受の上に、独断ならざるこれが現代的展開こそ仏教学三世一貫の理路であらう。速かなる本然の姿を望むや切。

## 同 発 善 提 心

秦 隆 真

本学五十周年記念に図書館が拡張されて、狭いながらに福祉学研究室ができた。わが宗門は大正勝代に宗教大学に社会事業研究室において矢吹教授を指導に当時日本に社会事業家の養成やのトップを切り、或は官界に或は民間（主として宗門に）に多数の社会事業従事者を送り出したのである。

爾来約四十年、教化事業や社会事業の開発に進展をつづけてきた宗門であるが、戦後余りのびないのは何であるか。

寺院及び宗門の物心両面の貧困である、否それよりも人的資源の不足である。かつて一寺院一事業の奨励で各地に教化及保育の事業がうえつけられ、又民生、更生保護関係の仕事に従事して居る宗門人のあることはせめての慰めであるが、誠に淋しい。

世は福祉国家の確立を目ざして前進して居る時、宗門人として何を以て貢献したらよいのか

将来をみつめて現代に生きなければならぬ時、仏教や宗意を通して社会福祉を背負つて雄々しく立ち上る人材が必要であると思う。

此の際、わが研究室を皆の協力によつて日に日に整備し充実してゆこうではないか、お互の精進によつて必ず正夢となるであらう。

今年度第一回四名の卒業生を送り出すのであるが後につゞいて多くの同志が居る。さて何から始めようか。

先づ先師の苦勞によつてきづいた仏教社会事業の跡をまとめたい。同時に仏教社会事業の現状を集録したい。その中に自ら仏教社会福祉思想や事業の実態がつかめるであらう。

又、研究は実践と併行せなければならぬと思う。できるだけ余暇をさいて調査と華仕に出かけることである。或る時は一人で、或る時はグループで街頭に、施設に、対象者に奉仕することこそ、福祉増進に寄与することになるであらう……

